

六臣注文選所引毛詩の訓読について

佐藤 進

一 和刻本『文選』正文の訓読と注文の訓読

和刻本六臣注『文選』慶安五年（一六五二）刊本では、正文と李善注との間で、同一句なものにもかかわらず訓読が異なっている（後印の寛文二年一六六二刊本も同様）。そもそも、『文選』正文の訓読は、足利学校本国宝『文選』のそれも含めて、注文の解釈とは異なる和訓がついていることがままあり、所与のテキストとは関係なく博士家伝来の読みが書き入れられたものだとされる（斯波六郎『文選諸本の研究』斯波博士退官記念事業會、一九五七年）。従って、『文選』所収句の正文の訓読と、注文引用のその訓読が異なるのは、伝承が異なる以上、当然のことではある。

筆者は『文選』張衡「西京賦」正文の訓読と李善注所引「西京賦」との間で、どれほど訓読が異なるかを機械的に調査したことがある（李善注では、「西京賦」約八〇〇句のうちその一七〇句が延べ二三〇箇所引用され、引用頻度の最も高い作品である）。その結果、違いが有意味であるか否かを問わず、七六％の訓読に何らかの相違が見つかった（佐藤進「文選の正文と注文における訓読の異同について」『日本漢文学研究』4、二〇〇九年）。

その一例は、以下のようなものである。

「彫楹玉碣」(八丁表六行目)

【本文】 彖とレルはしら玉ノつみいし(左傍) 彖とレルはしら玉ノつはみいし)

【注文】 (卷11・4九丁表) 彫レル楹玉ノ碣シ〔末仮名のみ〕

【注文】 (卷31・10丁裏) 彫—楹玉—碣〔音合符のみ〕

『文選』正文の訓読は遠く奈良朝にまでさかのぼることが可能とされ、現存の和訓は主として平安朝菅家の和訓が、足利学校九代席主の三要元佑によって移点され(足利学校本)、それとほぼ同じではあるが若干の違いを含むものが慶安五年刊本であるという。しかしながら、注文の和訓がどのような伝承を経たものであるか、具体的に検証した議論を聞かない。

二 『毛詩』の「薄」「言」

『毛詩』の「薄」「言」の解釈は、毛伝鄭箋と朱子集注との間に典型的な相違を見せる。古注では「薄」は「辞也」とあるのを受けて「ここに」と訓読し、「言」は「我也」とあるのを受けて「われ」と読む。一方、新注では「薄」は「少也」「聊也」とあるのを受けて、それぞれ「しばらく」「いささか」と読み、「言」は「辞也」とあるのを受けて「ここに」と読む。まず、『毛詩』に三三箇所出現する助詞としての「薄」字の訓読「ここに」「しばらく・いささか」についてみると、藤原惺窩(一五六一—一六一九)・林羅山(道春一五八三—一六五七)・山崎闇斎(一六一八—一六八二)・松永昌易(一六一八—一六八〇)・後藤世鈞(芝山一七二〇—一七八二)・佐藤坦(一斎一七七二—一八五九)らの訓読は、十二箇所目に存在する「薄之爲言、聊也」という集伝をめぐって、(一)道春はそこを境にして和訓をかえ、原則としてそれ以前を「しばらく」、以後を「いささか」と読む、(二)嘉点・芝山点・一斎点は、その箇所にのみ集伝「聊也」を反映させて「いささか」と読

み、ほかはすべて「しばらく」と読む、(三) 昌易はその集伝「聊也」をほぼ全書に反映させて原則として「いささか」と読む、という三種類の対応が存在した。そういう違いはあるものの、朱子学派ではただの一箇所も「薄」を「ここに」とは読まない。

「言」字については、惺窩は「ここに」と不読とを併用、采録篇以降では古注に従った「われ」も併記される(惺窩点本の安田安昌刊『五経』の采録篇以降は、底本の『詩経大全』では卷十五以下になり、全九七〇丁のうちの三四二丁、全体の約三分一強にあたる。この部分の筆録者が卷十四までの筆録者と交代して版下作成にかかわり、何らかの理由で古注派の読みを添えたであろうことが推察される)。林道春は「言」字を不読にするところはなく、集伝が「我」と敷衍する箇所もすべて「ここに」と読む。山崎闇斎・松永昌易・後藤芝山・佐藤一斎も原則的に「ここに」と読む(佐藤進「藤原惺窩の経解とその継承」『詩経』「言」「薄」の訓読をめぐって)『日本漢文学研究』5、二〇一〇年。注①)

すなわち、『毛詩』の「薄」と「言」の和訓は、古注に従った訓読か、新注に従った訓読かを検証する恰好のリトマス試験紙となり得る。そこで今回は『文選』の注文に引かれる『毛詩』の「薄」「言」「薄言」について、古注によるものか新注によるものかを検討し、訓読の実態を調査考察してみたい。

三 六臣注文選所引毛詩の訓読

李善注(まれに六臣注を含む)が引用する助字「薄」「言」「薄」||「うすい」、「言」||「いう」が固定している句は除く)を含む『毛詩』の訓読の状況は付表のようになる。

サンプルは合計八八例、そのうち歴然と新注に従った読みをつけているのは十二例・十四%であり、偶然に新注が混入したというものではない。文選注の訓読には、あきらかに朱子学導入以後の訓読の反映が見られると言って良い。

さらに詳しくみてみると、三〇卷二四丁裏「謝玄暉郡内登望」の「平楚正蒼然（平楚正に蒼然たり）に引く『毛詩』「漢廣」の「言刈其楚」は「言（ここ）に其の楚を刈（る）」と読んでいる（No.45）。宣賢は「われ其の楚をからん」、惺窩は「その楚のうばらをからん」（すなわち「言」字は不読）、道春は「ここに其のおどろをかる」とする。道春は惺窩が不読にするところを、何らかの訓読を施すのが通例である（注文の訓読にはまれに不読も存在する）。とすると、慶安五年（一六五二）刊本の注釈は道春点に近い訓読が反映されていると見て良い。道春が江戸幕府の儒官になったのは慶長十二年（一六〇七）のことであり、学問所を開設したのが寛永九年（一六三二）であるから、『文選』刊刻の前に道春点詩経が浸透していた。ただ、道春点官版『詩経大全』は承応二年（一六五三）刊行なので、これを直接には参照していない。

ついでながら、今回調査した『毛詩』に関連した正文についてみると、No.27とNo.50には「言」を「い」に」と読んでいる例が見られる。「駕言出遠山」駕してここに遠山に出づ」「言樹背與襟」ここに背と襟とに樹へん」ただ、これらはともに足利学校本では「われに」と読まれているのである。慶安五年刊本が三要の訓の単純な移点ではないことを示す例となる。そこでは、本文の訓読が新注の読み方に影響を受けた可能性がないではない。また、注釈とは関係のない部分に「薄」||「しばらく」の訓もあるので、正文については（特に訓読の下限について）慎重な考察が求められる。

注① 調査したテキストを左に示す。(1)(7)は古注の参照のために用いた。

- (1) 永正十八年（一五二二）抄写・清原宣賢（一四七五—一五五〇）加点（静嘉堂文庫蔵・汲古書院影印本）
- (2) 寛永五年（一六二八）藤原惺窩（一五六—一六一九）点・安田安昌刊五経（汲古書院影印本）
- (3) 承応二年（一六五三）林羅山（一五八三—一六五七）道春点・官版五経大全（家蔵本）
- (4) 享保十八（一七三三）年道春点・新刻校正五経〔明暦三（一六五七）新版五経〕（家蔵本）
- (5) 安永二年（一七七三）山崎闇齋（一六一八—一六八二）闇齋点・五経〔明和年間刊の再刻〕（家蔵本）

(6) 天明四年(一七八四) 片山兼山(一七三〇—一七八二) 山子点…毛詩正文(家蔵本)

(7) 寛政三年(一七九二) 松永昌易(一六一八—一六八〇)…新刻頭書詩経集注〔寛文四(一六六四) 頭書詩経集注〕
(家蔵本)

(8) 安政二年(一八五五) 後藤世鈞(一七二〇—一七八二) 芝山点…改正音訓五経〔天明七(一七八七)〕(家蔵本)

(9) 文化十年(一八一四) 佐藤坦(一七七二—一八五九) 一齋点…校定音訓五経(二松學舎大学図書館本)

なお、和刻本六臣注『文選』は家蔵の寛文十年刊を用いたが、適宜、慶安五年刊の汲古書院影印本を用いた。

【付記】 本論は二〇一〇年一〇月九日広島大学で開催された日本中国学会全国大会において報告したものである。その席上、貴重なご意見を賜わった。とりわけ、無刊記本の六臣注『文選』を参照してはいかかかというご意見については、後日参照したい旨をお答えしたが、残念なことに実現しない段階で本論を公表することになった。ご意見に感謝するとともに、実現できなかったことをお詫び申し上げます。

附表

文選卷丁	文選題目	文選正文	李注毛詩曰	李注書下し	毛詩題目	薄・言
6・23・b	左太沖魏都賦	奕奕菑畝	薄言菜苳 (劉注)	薄に言れ苳を採り	菜苳	
23・7・a	阮嗣宗詠懷詩	命駕起旋歸	薄言旋歸	薄く言に旋り歸る	采蔡・出車	薄：しばらく 言：ここに
26・35・a	陸士衡吳王郎中時從 梁陳作	薄言肅後命	薄言旋歸	薄に言旋歸	采蔡・出車	
27・16・b	王仲宣從軍詩	日暮薄言歸	薄言旋歸	薄に言旋歸る	采蔡・出車	
31・39・b	江文通雜體詩・謝混	薄言遵郊衢	薄言旋歸	薄に言旋歸	采蔡・出車	
23・48・a	王仲宣贈士孫文始	薄言慕之	薄言采之	薄言之を采	菜苳	
20・28・b	陸士龍大將軍譙會被 命作詩	薄言載考	薄言采之	薄言れ采る	菜苳	
22・8・a	殷仲文南州桓公九井 作	薄言寄松菌	薄言采之	薄に言れ之を采	菜苳	
54・23・a	劉孝標辨命論	冉耕歌其苳苳	薄言采之 (濟注)	ここにわれ之を采る	菜苳	
7・29・a	潘安仁藉田賦	薄採其茅	薄採其 (茅)[芳] 毛萋曰薄辭也	薄らく其の芳を采	泮水	薄：しばらく
40・2・a	任彥昇奏彈曹景宗	王師薄伐	薄伐玃狁	薄に玃狁を伐	六月	
36・29・b	王元長永明十一年策 秀才文	永言攸濟	永言孝思	永言孝思あり	下武	
58・47・a	王仲寶褚淵碑文	永言必孝	永言孝思	永言れ孝あり思	下武	
7・29・b	潘安仁藉田賦	永言孝思	永言孝思	永言れ孝思	下武	
43・21・a	孫子荆爲石仲容與孫 皓書	自求多福	永言配命	永言れ命に配せば	文王	
43・34・b	丘希範與陳伯之書	自求多福	永言配命	永言れ命に配せば	文王	
47・19・a	陸士衡漢高祖功臣頌	永言配命	永言配命	永言命(を)配	文王	
27・32・a	魏文帝樂府・善哉行	載馳載驅	駕言出游	駕せよ言れ出遊で	泉水	
16・21・a	向子期思舊賦	停駕言其將邁 兮	駕言出游	駕よ言れ出で遊ん	泉水	
23・34・b	潘安仁悼亡詩	駕言陟東阜	駕言出游	駕せよ言れ出でて 遊	泉水	
24・14・a	嵇叔夜贈秀才入軍	駕言出游	駕言出游	駕言れ出遊	泉水	
24・37・b	陸士衡答張士然	駕言巡明祀	駕言出游	駕言出遊ん	泉水	
28・9・a	陸士衡樂府・門有車 馬客行	駕言發故鄉	駕言出游	駕言れ出でて遊	泉水	
28・45・b	陸士衡挽歌詩	駕言從此逝	駕言出游	駕せよ言出で遊ん	泉水	
29・8・b	古詩十九首	迴車駕言邁	駕言出游	駕せよわれ出で遊	泉水	
31・26・a	江文通雜體詩・潘岳	駕言出遠山	駕言出游	駕言れ出で遊ん	泉水	
45・35・b	陶淵明歸去來	復駕言兮焉求	駕言出游	駕よ言れ出遊	泉水	
24・31・b	陸士衡於承明作與士 龍	駕言遠徂征	駕言徂東	駕して言東に徂く	車攻	
24・49・a	潘正叔贈陸機出爲吳 王郎中令	今子徂東	駕言徂東	駕して言東に徂く	車攻	
20・55・b	潘安仁金谷集作詩	親友各言邁	還(事)[車] 言邁	車を還してここに邁か ん	泉水	言：ここに
40・3・b	任彥昇奏彈曹景宗	不時言邁	還車言邁	車(を)還言に邁	泉水	言：ここに
24・49・a	潘正叔贈陸機出爲吳 王郎中令	載脂載轄	還車言邁	車を還してここにゆ かん	泉水	言：ここに

六臣注文選所引毛詩の訓読について

22・9・b	謝叔源遊西池	願言屢經過	願言思子	つ(ねに)言れ子を思	二子乗舟	
				【願の頭仮名、末仮名の位置にツと】		
24・36・b	陸士衡贈從兄車騎	願言思所欽	願言思子	願言子を思	二子乗舟	
26・29・a	潘安仁在懷縣作	願言旋舊鄉	願言思子	つ(ねに)言れ子を思	二子乗舟	
				【願の頭仮名、末仮名の位置にツと】		
42・13・a	魏文帝與梁朝歌令吳質書	願言之懷良不可任	願言思子	をもって言子を思ふ	二子乗舟	
16・33・b	潘安仁寡婦賦并序	徒願言而心痠	願言思伯	願言れ伯を思	伯兮	
25・42・a	謝靈運西陵遇風獻康樂	無萱將如何	願言思伯	願言伯を思ば	伯兮	
6・30・a	左太冲魏都賦	興言將曜威靈	興言出宿	興て言出でて宿す	伯兮	
14・8・a	顔延年楮白馬賦并序	王于興言	興言出宿	言(を)興出宿	小明	
25・7・a	陸士龍答兄機	興言在臨觴	興言出宿	言を興して出宿	小明	
40・15・b	沈休文奏彈王源	興言思清敵俗者也	興言出宿	興言出宿	小明	
6・30・a	左太冲魏都賦	聖武興言	興言出宿	興て言出でて宿す	小明	
30・24・b	謝玄暉郡內登望	平楚正蒼然	言刈其楚	言に其の楚を刈	漢廣	言：ここに
47・39・b	夏侯孝若東方朔畫贊并序	言歸定省	言告言歸	言に告言に歸る	葛覃	言：ここに
25・48・b	謝靈運酬從弟惠連	野蕨漸紫苞	言采其蕨	言に其の蕨を采る	草蟲	言：ここに
27・31・b	魏文帝善哉行	上山采薇薄暮苦饑	言采其薇	言れ其の薇を采	草蟲	
34・26・b	曹子建七啓并序	芳菰精稗霜露葵	言采其蓬	言に其の蓬を采る	我行其野	言：ここに
24・37・a	陸士衡贈從兄車騎	言樹背與襟	言樹之背	言に之うしろに樹ん	伯兮	言：ここに
26・5・a	顔延年直東宮答鄭尚書	言樹絲與桐	言樹之背	言れ之をきたに樹	伯兮	
23・2・b	阮嗣宗詠懷詩	設草樹蘭房	言樹之背	言れ之を背に樹ん	伯兮	
31・25・a	江文通雜體詩・潘岳	銷憂非萱草	言樹之背	言れ之を背に樹ん	伯兮	
53・5・a	嵇叔夜養生論	萱草忘憂	言樹之背	言れ之を背に樹ん	伯兮	
40・6・b	任彥昇奏彈曹景宗	理絕言提	言提其耳(濟注)	言其の耳を提	抑	
20・9・b	曹子建應詔詩	駢驂倦路再興	言念君子	言れ君-子を念	小戎	
21・22・b	顔延年秋胡詩	寢興日已寒	言念君子	言に君-子を念	小戎	言：ここに
23・33・a	潘安仁悼亡詩	寢興日存形	言念君子	言に君子を念ふ	小戎	言：ここに
26・4・b	顔延年直東宮答鄭尚書	寢興鬱無已	言念君子	言れ君-子を念	小戎	
14・6・b	顔延年楮白馬賦并序	晝秣荆越	言秣其馬	言は其の馬(に)秣	漢廣	
20・8・a	曹子建應詔詩	秣馬脂車	言秣其馬	言れ其の馬に秣ん	漢廣	
24・14・a	嵇叔夜贈秀才入軍	秣馬華山	言秣其馬	言其の馬に秣かはん	漢廣	
24・49・a	潘正叔贈陸機出為吳王郎中令	我馬既秣	言秣其馬	言れは其の馬に秣ん	漢廣	
27・1・b	顔延年北使洛	秣馬陵楚山	言秣其馬	言れ其の馬に秣	漢廣	
34・42・a	曹子建七啓并序	呂望所以投綸而逝也	言綸之繩	言れ之の繩を綸ん	采芣	
58・4・a	顔延年宋文帝元皇后哀策文	言觀維則	言觀其旂	言は其旂を觀	泮水	

7・29・a	潘安仁藉田賦	言藉其農	言觀其旂	われ其の旂を觀る	泮水
20・33・a	應吉甫晉武帝華林園集詩	有酒斯飮	酌言嘗之	酌て言れ嘗む	瓠葉
30・60・a	謝靈運擬魏太子鄴中集詩	酌言豈終始	酌言嘗之	酌_言れ之(を)嘗	瓠葉
24・49・a	潘正叔贈陸機出為吳王郎中令	星陳夙駕	星言夙駕	星みて_言夙に_駕せよ	定之方中
16・36・a	潘安仁寡婦賦并序	龍輻儼其星兮	星言夙駕	星_言れ夙に_駕	定之方中
26・35・a	陸士衡吳王郎中時從梁陳作	夙駕尋清軌	星言夙駕	星みて_言れ夙に_駕す	定之方中
28・42・b	陸士衡挽歌詩	夙駕驚徒御	星言夙駕	星みて_言夙く_駕	定之方中
60・6・b	任彥昇齊竟陵文宣王行狀	公星言奔波	星言夙駕	星みて_言れ夙_駕	定之方中
20・8・a	曹子建應詔詩	星陳夙駕	星言夙駕	星みて言れ夙に_駕	定之方中
20・32・b	應吉甫晉武帝華林園集詩	備言錫命	備言燕私	備に_言燕-私せり	楚茨
25・20・b	盧子諒贈劉琨首并書	厠燕私之歡	備言燕私	備って言れ_燕-私せり	楚茨
57・34・a	顏延年陶徵士誄并序	念昔宴私	備言燕私	備て言燕-私せり	楚茨
58・42・a	王仲寶褚淵碑文	披文於宴私之夕	備言燕私	備て言燕-私せり	楚茨
23・36・a	謝靈運廬陵王墓下作	眷言懷君子腸	眷言顧之	かへりみて言顧みる	大東
24・35・a	陸士衡贈尚書郎顧彥先	眷言懷桑梓	眷言顧之	眷_言之(を)顧	大東
25・36・a	謝宣遠答靈運	深茲眷言情	眷言顧之	眷_言顧之	大東
25・5・b	陸士龍為顧彥先贈婦	遠蒙眷顧言	眷言顧之	かへりみて_言かへりみる	大東
31・31・b	江文通雜體詩・盧諶	眷顧成綢繆	眷言顧之	眷_言れ之(を)顧	大東
59・22・b	王簡栖頭陀寺碑文	眷言靈宇	眷言顧之	眷_言之(を)顧	大東
4・11・a	張平子南都賦	客賦醉言歸	醉言歸	醉_言れ_歸	有駮
17・31・a	傅武仲舞賦	有醉歸之歌	醉言歸	醉て言れ_歸	有駮
28・2・a	陸士衡樂府・猛虎行	靜言幽谷底	靜言思之	靜_言之を思	柏舟
15・32・b	張平子思玄賦	柏舟悄悄	靜言思之	靜_言れ之を思	柏舟

88 例中 12 例

14%